

# ノーモア・ヒバクシャ通信 第46号

2019年5月9日

ホームページ <http://www.kiokuisan.jp/>  
継承ブログ <http://keishoblog.com/>  
フェイスブック <https://www.facebook.com/kiokuisan>  
ツイッター <https://twitter.com/nomorehibakusha>

発行者  
NPO 法人 ノーモア・ヒバクシャ記憶遺産を継承する会  
〒102-0085  
東京都千代田区六番町 15 プラザエフ 6F  
Tel/Fax 03-5216-7757 (直通)  
Email [hironaga8689@gmail.com](mailto:hironaga8689@gmail.com)  
郵便振替口座 00110-5-292881  
口座名義 ノーモア・ヒバクシャ記憶遺産を継承する会

## ★ もくじ ★

I. 第7回通常総会のご案内	1
II. 未来につなぐ被爆者の記憶プロジェクトのご報告	3
(1) 【埼玉】3/31 (日) 春休み親子企画『親子で学ぶ げんばくってな〜に』を開催	
(2) 【東京】4/6 (日) ミニ企画⑨「被爆者のお話と茶話会」を開催しました	4
(3) 【東京】5/19 (日) 「未来につなぐ被爆者の記憶プロジェクト体験会	6
〜被爆者ととともに語り継ぐ〜」のご案内	
III. ≪被爆者運動に学び合う学習懇談会≫シリーズ12の報告	7
／シリーズ13のご案内	10
IV. DVD「声の世界を動かした」の発行・活用について	
V. 継承活動に取り組む人々をつなぐプロジェクトのご報告	
VI. 資料のご寄贈ありがとうございました	
VII. 【関連行事のお知らせ】	11
(1) 「夏の雲は忘れない」最終公演／(2) 永田浩三さん講演「ヒロシマを伝える意味」	

## I. 第7回通常総会のご案内

認定特定非営利活動法人 ノーモア・ヒバクシャ記憶遺産を継承する会  
第7回通常総会のご案内

風薫るさわやかな季節を迎えましたが、皆さまにはいかがお過ごしでしょうか。  
日頃より当会の活動にご理解をいただき、真にありがとうございます。  
標記総会のご案内を申し上げます。

昨年度は、資料を電子化・公開する電子図書館構築に向け資料保存のサーバーを開設し、  
被爆者の記憶をインターネット上で交流するシステムを関係者の参加で試しながら全国展  
開をめざし、また、被爆者資料の整理と歴史研究・被爆者運動史の映像制作・被爆者の記憶  
を継承する人々をつなぐ取材活動など次世代の多様な参加も進んだ年となりました。

一方、国際情勢では非核化をめぐる米朝首脳会談が開催されるものの、トランプ米大統領

領はINF（中距離核戦力）全廃条約の離脱を表明するなど、核のない世界に逆行する動きを強めています。これらに抗するためには、ヒバクシャ国際署名を広げ、核兵器禁止条約の批准を促進し、「ノーモア・ヒバクシャ」の国際世論をさらに大きくしていくことが求められています。「ノーモア・ヒバクシャ継承センター」の設立と世界への発信はその一翼を担うものです。

今年度は「ノーモア・ヒバクシャ継承センターをつくるため」、募金活動を大きく広く展開する取り組みを強めます。第7回通常総会の要領は、下記の通りです。

何かとご多用の折とは存じますが、ぜひご出席くださるようお願いいたします。

なお、ご出席願えない正会員の皆さまには、お送りしました議案書等をご検討いただき、書面または代理人をもって議決権を行使いただきますようお願い申し上げます。また、賛助会員の皆さまにも、傍聴出席いただければ幸甚に存じます。

記

### 第7回通常総会

1. 日 時 2019年5月25日（土）午後1時～4時  
1. 場 所 東京四谷主婦会館プラザエフ 5階会議室  
東京都千代田区六番町15 TEL03-5216-7757

#### 1. 議 題

（審議事項）

- 第1号議案 2018年度事業報告（案）の承認の件  
第2号議案 2018年度決算報告（案）の承認の件  
第3号議案 役員選任の件

（報告事項）

1. 2019年度事業計画及び予算  
2. 2020国際平和博物館会議への参加について

### 正会員の皆様へ 出欠のご連絡ならびに欠席の場合の手続きに関するお願い

- 第7回通常総会の出欠について、同封の出欠通知（ハガキ）を5月20日（月）までにご返送ください。
- 第7回通常総会にご出席の際には、この案内状を受付にご提示ください。
- ご来場の際、同封の「第7回通常総会議案書」をご持参ください。
- 第7回通常総会にご欠席の場合は、同封の出欠通知（ハガキ）に記載されている（1. 書面議決書）か、（2. 委任状）か、いずれかに必要事項をご記入のうえ、出欠通知とともにご返送くださるようお願いいたします。

### 同封資料

- 第7回通常総会議案書
- 出欠・書面議決書・委任状（正会員用返信用ハガキ）

賛助会員、賛助団体への皆さまへ

総会へご出席いただける場合、ご氏名あるいは団体名をFAXまたはEメールにてご連絡ください。FAX：03-5216-7757/E-mail:hironaga8689@gmail.com  
議案書をご希望の方は、ご連絡いただければお送りします。

## II. 未来につなぐ被爆の記憶プロジェクトのご報告

### (1) 【埼玉】3/31（日）春休み親子企画『親子で学ぶ げんばくってな～に』を開催

春休み親子企画「げんばくってな～に？」をコーププラザ浦和で開催しました。メインスピーカーの坂下紀子さん（2歳被爆 広島）、親子2組5人をはじめ10名が参加、開会挨拶、自己紹介に続いて「クイズにチャレンジ！ げんばくについて学ぼう！」。小学校低学年の児童に原爆被害をどうやって伝えるか？ 何を伝えるか、どうやって伝えるか試行錯誤してクイズの形にしてみました。子どもたちも楽しく、真剣にクイズにむきあっていました。



クイズコーナーでは写真のような問題を出題。スカイツリーの画像に赤い玉で火球を表現。被爆者の「あの時、街の上にもう一つ太陽が生まれた」という言葉を子どもたちに実感してもらうには～と工夫しました。クイズの問題と解説は20代のスタッフ、データ化PJに参加のお母さんが考えました。

だい3もん  
ひろしまのげんばくは、じめんから  
どのくらいの高さでばくはつしたでしょうか

- A** やく580メートル
- B** やく58メートル
- C** やく5メートル

クイズに続いて坂下さんからご自身の体験をお話していただき、休憩を挟んで、坂下さんのお話を聞いて感じたこと、考えたことを親子で話し合っ感想にまとめマッピングしました。

ボランティア・スタッフの方がクイズコーナーと坂下さんのお話の様子を短い紹介動画に編集していただきました。こちらからご覧いただけます。

⇒<https://youtu.be/Y1pJbaFYCQ>

#### 《親子話し合っマッピングした感想》

「被災者の方のお話を聞ける機会が今までなかなかなかったので、よい機会になりました。子どもはまだわからないかもしれませんが、まず母である自分が戦争や原爆の怖さ・恐ろしさを理解していく必要があると思いました。息子は、自分がその当時の子どもの立場だったら、ものすごく怖い、残酷、とのこと。母の立場としても、幼い子供を連れて逃げるのがどんなに大変か、また戦後の生活を考えると精神的な苦しみが考えられない程、

あったんだろうなと想像しました。子どもを思う気持ちは、昔も今も変わらないと思うので、戦争で大事な子どもを亡くした親御さんのことを思うと、本当にやりきれない思いです。被災者の方の貴重なお話は、これからも、何度も子どもたちに聞かせ、今の幸せについて日々考える時間をつくろうと思います。」

「今日初めて黒い雨が降ってきた話を聞いて怖くて仕方なくなりました（小2娘）。目の前で聞くお話には、本で読んだり、映像で見るのとは比較できないほどのリアリティがありました。聞けば聞くほどお話の中に引き込まれていき、まるで1945年8月6日のあの朝にタイムスリップしたような気分になり、目を閉じると胸が苦しくなりました。今日を機に親子で被爆や戦争に関して話し合いたいと思います。今回直接語り部の方のお話を伺う機会に恵まれて、改めて被爆・戦争に対する意識が高まり、感謝しております。」

最後に坂下さん、スタッフも一緒に今日の感想を交流して閉会しました。

#### ■ 坂下さんから

「親子で参加というのは継承を考えるいい企画だと思いました。」

#### ■ スタッフから

「原爆投下の日の実態がリアルにわかった。過去の問題じゃなくて未来への問題提起。」

「坂下さんのお話で、お母さんやおばあちゃんにどのように継承してもらったのかの話が自分に重なり、すごく印象的でした。」



13時開始、14時45分閉会の予定だったのですが、全体的に時間が伸びて終了は15時閉会となりました。坂下さん、ご参加いただいたみなさん、企画運営等にスタッフとしてかかわってくださったボランティアのみなさん、ありがとうございました。

最後に参加者の心に残った坂下さんの言葉をご紹介します。「人が人間として死ねなかった。人が物のように死んでいった。」「こころの被爆者になって下さい。」過去の坂下さんのお話はこちらでお聞きいただけます⇒<https://youtu.be/2m9Bo9g9WZg>

（「未来につなぐ被爆の記憶」データ化プロジェクト）

## （2）【東京】4/6（日）ミニ企画⑨「被爆者のお話と茶話会」を開催しました

4/6（土）東京の四ツ谷にある主婦会館プラザエフでミニ企画⑨「被爆者のお話と茶話会」を開催しました。今回の企画はピースボートと継承する会の初めてのコラボ企画。参加者は12名、顔の見える茶話会ということでいつも定員は少なめで企画しています。

今回はブラジル在住の渡辺淳子さんから被爆の体験、ご自身の歩みや想いをお聞きしました。渡辺さんの言葉はとても力があって、受け継ぎ手の心をうちました。



「私は被爆時2歳でした。記憶としてはなくても、「黒い雨」を浴び、生死をさまよう体験を大人になってから聞き、自分が被爆者であることを知った。60歳から始めた継承の大切さを強く感じる。だから、皆さんも自分が感じた思いを伝えて欲しい。」

「原爆投下は人間が人間に行った行為である。被爆当事者でなくても事実を知ったときの実感を自分を信じて伝えていけば良い。」

「人の真似ではなく、自分が感じたことを、その場で話せばいいのだという言葉が、心に残りました。自分を信じること、とおっしゃっていたことも、とても印象に残りました。」

渡辺さんのお話をお聞きした後、休憩を挟んで茶話会。渡辺さんのお話を受けて、今回は「継承すること」が中心テーマになった感じでした。

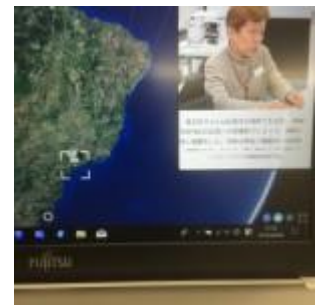
「初めて被爆者のお話を伺いました。被爆の記憶のない渡辺さんが、色々な方との出会いや資料・映像をご自身の糧として自分の言葉で、自分を信じて発せられる言葉がとても心にひびいたと同時に心をゆさぶられました。被爆の記憶がないと渡辺さんはおっしゃっていましたが、渡辺さん御自身に人の心の痛みを自分の心のいたみとして受けとめる感受性や共感するお力があったのだと思います。被爆2世、3世の方やおしばいをされているピースボートの方や色々な活動をされているお話をきいて、とても世界が広がり、自分も何かしたいと思うようになりました。」



「前回（ミニ企画⑧）は、原爆の記憶を持った方のお話を聞きましたが、原爆体験のない自分に、誰かに伝えることは難しいのではないかと思いました。しかし、今回は、原爆の記憶はないけれど、自分の問題として感じ、いろいろな人からの話や、資料から学んだことを話されている淳子さんからも、前回と同じくらい、伝わってくる思いや衝撃があったことに驚きました。同時に、自分にも、必ずできることがあるのだと確信できました。これからも、自分の問題として考え、アンテナを張り、多くのことを学んで、出会った人々にも伝えていきたいと思いました。」

して考え、アンテナを張り、多くのことを学んで、出会った人々にも伝えていきたいと思いました。」

今回のつどいの最後に、渡辺さんのお話のサマリーや参加者の感想をマッピングしました。「未来につなぐ被爆の記憶」では、被爆者の原住地にピンを立てています。渡辺さんのピンはブラジルのサンパウロに立てました。被爆者は広島・長崎だけではなく日本全国、海外にもいる、そして昔話ではないことが見る人に伝わるように。渡辺さんの写真、サマリー、参加者の感想がマッピングされました。いちばん最後の出典に、サマリーのもとになった体験記へのリンクがあります。





閉会後も和やかにお話が続きました。

「少人数なのでじっくりとお話が聞け、他の方のお話も聞けてよかった」

「参加者のみなさんとお話しながら会がすすんでいった。本当の意味でひとりひとりが参加者になれる場だった。」

渡辺さんをはじめ参加いただいたみなさま、準備にご協力いただいたみなさま、ありがとうございました。

(未来につなぐ被爆の記憶データ化PJ)

### (3) 【東京】5/19(日)「未来につなぐ被爆の記憶プロジェクト体験会～被爆者とともに語り継ぐ～」のご案内

戦後74年が過ぎ、被爆者の平均年齢は83歳を超えました。「継承する会」では、被爆の実相を記録・保管するとともに、後世に伝えるために広く発信することが喫緊の課題と考え、デジタルアーカイブを活用した継承・発信の取り組み「未来につなぐ被爆の記憶プロジェクト」をすすめてまいりました。

2019年度は、全国各地で体験会を開催し参加のすそ野を広げていくことをめざしています。その第一弾として、5月19日に東京で「未来につなぐ被爆の記憶プロジェクト体験会被爆者とともに語り継ぐ」を開催いたします。体験会ではグループに分かれて被爆者と参加者が交流し、その様子や参加者の感想などをデジタルアーカイブに登録します。

平和な世界を残していくために、「被爆の記憶を未来につなぐ」取り組みに、ぜひご参加ください。参加申し込みなど詳しくは同梱の案内チラシをご参照ください。

#### 《企画概要》

【日時】2019年5月19日(日) 14時～16時

【場所】主婦会館プラザエフ5F会議室

(東京都千代田区六番町15、JR四ツ谷駅下車すぐ [アクセス](#))

【定員】30名、先着順で定員になり次第締め切ります。

【参加費】500円(学生・高校生は無料)

【主催】

特定非営利活動法人 ノーモア・ヒバクシャ記憶遺産を継承する会

【共催】

日本原水爆被害者団体協議会

日本生活協同組合連合会

### Ⅲ. 被爆者運動に学び合う学習懇談会《シリーズ12》報告

「被爆者運動の自立を戦後史に位置づける」をテーマに

ノーモア・ヒバクシャ記憶遺産を継承する会は4月13日（土）、東京・四ツ谷のプラザエフで第12回「被爆者運動に学び合う学習懇談会」を開催しました（日本被団協との共催。参加者33人、うち被爆者8人）。

「被爆者運動の自立を戦後史に位置づける」をテーマに松田忍さん（昭和女子大学准教授）が問題提起。原水爆禁止運動のなかで誕生した日本被団協は、1960年代の原水禁運動



■ の分裂を受けて活動休止状態に陥りました。そこから『つるパンフ』作成に至る一連の流れが被団協の『50年史』には「運動の再生」と記されています。この時期の被団協関連文書の解読を通じて、分裂から「再生」に至るロジックを明らかにすることが主題でした。

松田さんは、この頃の運動については原水禁運動の路線をめぐる対立や分裂の危機に目が向きがちだが、1960年代半ばの代表理事会での議論や運動方針、執行部への

批判の手紙などを詳細に読んでいくと、それは単なる「再生」にとどまらない大きな質的転換を伴った変化であったのではないかと切り出しました。

原水協との関係が激しく議論されたのも事実だが、活動の停滞はあくまで日本被団協（執行部）の問題であり、東京や東北、山口、福岡など各地には、被爆者「一人一人」を掘り起こしながら進める運動が生まれてきていました。それを東友会（伊東壮事務局長）の資料などで示しながら、一人一人の被爆者がそれぞれの想いをもちより被爆者としての要求をとりまとめていくプロセスが確立したことに大きな意味を見出し、執行部批判の争点は、被団協の運動と組織の民主的な運営にあったことを指摘。その過程で運動の重点が広島から東京へと変化したことを明らかにしました。

松田さんは、被団協の『50年史』について、「運動団体が自ら手がけた『年史』として、よくもこれだけ抑制的・中立的に書けたものだ。だからこそ私も安心して資料として使うことができる」と評価しておられますが、このたびの報告を準備しながら、『50年史』には、「再生」後の被団協運動に参加することが被爆者に「生きる意味」を与えてきたことが十分には記されていないのではないかと感じた、と貴重な指摘もされました。

参加者のなかには、他の分野の運動や研究に関わる方たちや昭和女子大学の戦後史プロジェクトの学生さんらもおられ、活発に意見交換がされました。

#### 〔主な討議内容〕

○ 国家補償制度、戦争しないしくみをつくることは国民的課題だと口では言えるが、そ

れをどうしたら実現できるかとなると、次々に壁が出てくる。被爆者のなかには、もう援護法はいいんじゃないかという気持ちもある。そう言いながら、(伊東) 壮さんの言う生き方を見つけるというのも実感する。それをどう結合していくか。もう近々、被爆者がいなくなることも間違いない。被爆者が提起した課題は被爆者がいなくてもやらなくては行けないが、そういう運動をどう創造していったらよいか。

松田：少なくとも、ノーモア・ヒバクシャの会がやっていることは意味がある。60年代だけでなく70～80年代でも、被爆者が自らの思想を磨き上げてきた過程、プロセス自体は、同じ人間なら理解できる。つらかったからこそ運動が起こり大きくなってきたことは、歴史として書けば理解されると、そこに希望をもっている。

○ 70年から運動に参加したので、論争については先輩たちからいやというほど聞かされた。当時の頭でっかちの理論は被爆者にはなじめなかったが、法律や対策が前進し始めた時期でもあり、自分たちの要求を大事にしてきた。77シンポではいろんな人が調査員にもなり、被団協を中心に市民団体との協力もすすんで、運動が質的に変化していった。

○ 60年代は、他の団体にとっても難しい時期だった。安保を背景にした分裂の時代で、青年団の運動も一人一人の生き方をテーマにしながらかつ皮していった。被爆者も似たようなところがあるのかな。上の方でドンチャンやっているが、被爆者がいかに成長し変わっていったか、がよく見えて参考になった。

松田：その横のつながりを見ていきたいと思う。そこが出ていったら、60年代運動史のなかに被団協の変化が位置づけられていくのかな、という感じがする。

60年代のこの変化というのは、被爆体験を思い出してやっているというよりも、被爆体験があって生きてきて60年代に至り、いま、60年代の被爆者の生活実感の中からやるべきことをやる、というところが大事なのではないか。

○ 60年代には、戦争の危機感(アメリカの戦争に引きずり込まれる)がある。それと被爆体験が一体化する。今それ(引き込まれている)が実証されている気がする。

○ 原水禁運動の複雑なプロセスが影響した停滞から再生の時期は、被爆者運動が自身の意味を見つけ出す過程でもあった。60年代とはどんな時代かを見る場合、米ソの覇権争い(軍拡も経済も)やベトナム戦争の影響が大きい。「いかなる国…」も今なら当たり前だが、当時にしたら大問題だった。60年安保の後、政治運動から身をひきはじめ、いろんな人がいろんなことを考え始めていた。伊東氏のようなアイディアも、提出した人はあちこちにいるのではないか。

松田：東北ブロックから提示された6つのアイディア(1966年度日本被団協運動方針(案)、各県被団協の「近年」の活動が列挙されている)が明らかになればよいが、まだ県段階の史料が見えない限界がある。

○ 空襲被災者(傷害者・遺族)の補償運動を迫る共同研究で、杉山千佐子さんの資料などを整理した。被爆者運動と比べると本当に小さな運動だが、63年頃に東京で被災者の結集ができたときの契機は、旧軍人への恩給、補償の充実との格差(一般市民に何ら補償がない)にあった。ベトナム戦争の映像ニュースを見聞きするなかで、空襲記録運動への違和感(記録だけでよいのか)から援護法を要求する杉山さんたちの運動へ、という二段階



の動きがあった。

運動を支えるモチベーションは、被災者どうしが語り合い交流できる場を見出し結集していく日常性・生活レベルと、政治論・組織論のレベルの、二重構造をもっているのかな、と思った。松田さんは今日、政治論や思想面の転換点をあざやかに描き出してくれたが、最後に提起された日常性・生活レベルの、語り合ったり交流できるよこびの部分でいくと、底流にあったものが60年代半ばに再発見され、浮上してきたということなのかな、と見ている。

松田：50年代半ばには、「そっとしておいてほしい」という意見が多かった。一方で、日常のなかで被爆者としての自覚をもち運動をする人たちが生まれ、被爆者意識がふれあうことで広がりつながり合っていく。政治・組織論と日常性とまとめていただき、自分のやっていることがよく分かった。

記録と行動することの意味は？ 行動しないのに、なぜ記録するのだろうか。

○ 早乙女さんや松浦さんには、自分が体験した空襲の実像を証明する資料がない、隠されているという意識が強い。それを補うのが市民の記憶、手記だということで集める運動が始まったが、幅広く結集するため、補償運動に踏み込まず記録運動に徹したのかもしれない。

○ それは体験の違いもあるのではないか。空襲による傷害は治療が終われば終わるが、被爆者の場合、放射線の被害を受けつづけており、いつまでも忘れることができない。

松田：『「あの日」の証言』を読んで、原爆と空襲被害の圧倒的な差を感じた。焼野原や黒焦げの死体は同じだが、空襲の場合は、焼夷弾が落ちてきて、防空壕に逃げて…といった時間の流れがある。原爆は、瞬間的にいきなり〈地獄〉になる。何が起きたか全然分からず、人間の理解を超えているところがある。

○ まったく想像できないことが起こった。それと、こんなことは二度と起こってはいけない、というのが一体となっている。(伊東さんの言う) 3つの類型(①こんなにひどかった、②身体的障害のみで原爆と自分を結びつけている、③戦後政治のなかで積み重ねられた被害も含めて原爆被害を総合的にとらえている)は、個人でもその過程を通るし、自分もそうやってきた。

○ 伊東さんが運動の最終目標を被爆者が「生きていてよかった」と感じる状態におきながら、世界大会の雰囲気にはマイナスイメージを抱いているのはなぜだろうか。

松田：世界大会は日常・生活に根づいていない。伊東さんは、「幹部は地域に帰れ」と、本当の仕事はそこにあると言っていた。

○ 伊東さんの原点は、国立で一軒一軒被爆者を訪ね歩いたところにある。被爆者を探して手帳申請をするとりくみは、被爆者運動の最初からあったことだ。

○ 「被爆者に「なる」」をテーマに文化祭展示をした。反応がよく、やった！と思っていたが、12.15の公開ミーティングで岩佐さんから「被爆者になんかなれねえよ」と言われ、びっくりした。プロジェクトのメンバーで話し合い、岩佐さんらの話を聞いて、何も知らない私たちがちょっと分かったつもりになっていたが、長い歴史のなかのほんの一部にすぎないこと、「二度と被爆者をつくらない」と活動してきた被爆者運動がいろんな人たち

の思いで成り立っていたことを知った。

### 《次回 学習懇談会のお知らせ》

シリーズ13回目の学習懇談会は6月29日（土）、1968～94年、広島赤十字原爆病院の医療ソーシャルワーカーとして被爆者相談に携わってこられた若林節美さん（原爆被害者相談員の会）をお招きして開催します。

テーマは「被爆者相談の現場から原爆症認定問題を考える」。現行制度の根幹である原爆症認定制度に光をあて、現行被爆者施策の問題点を考え合います。多数ご参加ください。できるだけ事前のお申し込みをお願いします（詳細は同封のチラシをご参照ください）。

## IV. DVD「声の世界を動かした」の発行・活用について

昨年12月、ノーモア・ヒバクシャ継承センターの設立をめざして開催した「被爆者の声を未来につなぐ公開ミーティング」では、冒頭、被爆者運動の歴史と継承する会の役割を紹介する「声の世界を動かした」映像作品を上映しました。これは、武蔵大学の学生が、岩佐当代表理事へのインタビューを含め資料・文献を調べ探り、自分たちの視点から制作し発表したものです。会場では大変好評で、田中熙巳日本被団協代表委員も歴史の勉強に活用したい旨、発言されました。

関係者のご協力で著作権の問題などもクリアして、DVD「声の世界を動かした」を発行する運びとなりました。頒価1000円（送料実費）で普及します。「ノーモア・ヒバクシャ継承センター」設立と募金の呼びかけを広くご理解いただくためにご活用ください。お問い合わせや注文は、日本被団協及びノーモア・ヒバクシャ記憶遺産を継承する会事務局にメール等でご連絡ください。

## V. 継承活動に取り組む人々をつなぐプロジェクトのご報告

4月21日（土）夕方、主婦会館プラザエフの会議室でこれからの取材先などについて打ち合わせを行いました。

昨年3月の別冊発行以降のレポートは以下の2本です。



### ■ これまでの取材記事

（東京）3/8（金）原爆の図第10部《署名》を見ように参加して～「被爆三世の葛藤」～

（広島）4/4（水）ブラジルに生きる被爆者に取材して～「在ブラジル被爆者の声」～

どちらも継承ブログ (<http://keishoblog.com/>) でお読みいただけます。

通信別冊としての発行は4月を予定していましたが、もう少しあとになりそうです。

## VI. 書籍のご寄贈ありがとうございました

○ 橋爪文さん（神奈川、広島被爆）より

『ヒロシマからの出発』（トモコーポレーション、2014.7）

『橋爪文エッセイ集 8月6日の蒼い月—爆心地—・六kmの少女が世界に伝えたいこと』（コールサック社、2017.8）

〔楽譜〕作詞：橋爪文、作曲：中村雪武『メゾ・ソプラノと児童合唱のための組曲 二次よ永遠に—真実井房子原爆体験記より』（シンキョウ社、1994.11）

〔随筆〕『不思議な国トルコ』（教報ブックス、1988.12）

○ 三本木郁さん（北海道、広島被爆）より

『戦いに若き命散らすことなく—私の原爆体験記』（自費出版、2019.3）

○ 大久保賢一さん（弁護士）より

『「核の時代」と憲法9条』（日本評論社、2019.5）2冊

## VII. 【関連行事のお知らせ】

### （1）朗読劇「夏の雲は忘れない」の公演が今夏で最後に

渡辺美佐子さんら18人の女優が2008年から続けてきた、原爆を体験した子どもらの手記をもとにした朗読劇「夏の雲は忘れない」（主催：夏の会）が今夏で終わることになりました。被爆40周年に始まった「この子たちの夏」から数えると35年。毎年、全国各地を巡演し、原爆の惨禍といのちの大切さを多くの人びとに伝え、感動を呼び起こしてきました。

東京では6月24日（月）昼の部 14：00、夜の部 18：30（於・日本橋劇場（日本橋区民センター内））の2公演。夜の部は女優たちによるアフタートークもあります。一般 ¥2,500、高校生まで ¥1,000

その他、広島（7/1～5）、高知（7/7～9）、愛媛（7/10・11）、香川（7/12・13）、徳島（7/15～17）、奈良（7/20）、静岡（8/17）、群馬（8/19・20、22）、新潟（6/29、8/21）、埼玉（8/23・24）など全国で28公演が行われます。

ぜひ、多くの方にご覧いただきたく、ご案内いたします。

スケジュールなど詳細は、下記「夏の会」事務局にお問い合わせください。

発売開始日＝5月23日（木） 受付10：00～17：00

連絡先＝090-8004-1985（「夏の会」事務局）

### （2）武蔵大・永田浩三さん 講演「ヒロシマを伝える意味」のお知らせ

武蔵大学の学生の映像作品「声の世界を動かした」を指導された永田浩三さん（社会学部教授）が、「ヒロシマを伝える意味～被爆体験は世界のなにを変えるのか～」と題して講演されます。

2017年12月にはじまった東京藝術大学 音楽学部学 理科主催(後援/日本ペンクラブ、共催/自由と平和のための東京藝術大学有志の会)による「芸術と憲法を考える連続講座」の第19回目。入場無料、申し込み不要。藝大生も一般市民も、どなたでも参加できます。

永田さんは、「核兵器禁止条約に至るまでの70年余、ヒロシマ・ナガサキを体験した人としらない人の間に、架け橋が生れるにあたって、さまざまな市民の知られざる努力がありました。困難をこえて、日本を起点に世界を動かすことがきっとできる。そんな元気の出るお話をしたい」と言っておられます。

◆ 日 時：7月24日(水) 18:30～(30分前に開場)

◆ 会 場：東京藝術大学 上野キャンパス 音楽学部5号館1階109教室  
東京都台東区上野公園12-8

詳細は、自由と平和のための東京藝術大学有志の会HPへ

<https://www.peace-geidai.com>